

フクシマの現実を知ろう！
チェルノブイリとフクシマと結んで
支援・交流を強めよう！

チェルノブイリ原発事故28周年の集いが、4月27日に大阪市立総合生涯学習センターで開かれました。90名の参加者で会場は一杯。事故後3年経った福島を、28年経ったチェルノブイリの現状を知りたいという人々の思いに包まれました。

集会では、まず犠牲となられた方々に黙とうを捧げました。その後、長崎被爆者の山科代表が車いすで元気に登場し挨拶。そして福島県二本松市の佐々木さんの講演、休憩をはさみ紙芝居「見えない雲の下で」（浪江町から避難したおぼちゃんの体験）の上演、振津さんの「チェルノブイリ 28年の被災地訪問報告」と続きました。なにしろ知ってほしいこと、報告したいことが沢山あり、残念ながら時間が全く足りませんでした。質疑応答の時間も殆どとれませんでした。それでもフクシマ・チェルノブイリのそれぞれの原発事故被災地の様子的一端を知ることができました（詳しくはそれぞれの報告をご覧ください）。

佐々木さんの飾らない朴とした話し方から、「そこに生きている人の人生が奪われてしまった」など、放射能汚染による福島の苦しみや悲しみが強く伝わってきました。また原発から50km離れていながらホットスポットとなってしまう二本松市で、被ばくから子ども達を守るために懸命に努力されている。3年間悩み続けながら、それでも少しでも福島をきれいにして次の世代にバトンタッチしたいという決意。淡々としたその語り口から「フクシマを忘れないでほしい」「子ども達を護ってほしい」という気持ちが痛



いほど伝わってきました。そして「生き方が問われている」という問いかけが迫ってきました。

振津さんは、今まで交流・支援を続けているベラルーシの被災地クラスノポリエ・チェリコフや、首都ミンスクのマリノフカ地区の「移住者」達を訪問し、今回も現地が必要とされている物を現地調達して届けるなど、支援と交流を深めてきたこと、また子ども達の保養などの取り組むロシアの汚染地ノボツィコフの NGO との交流・視察について報告しました。

昔懐かしい拍子木で始まった長沢由美さんの紙芝居も好評で、フクシマ事故時の避難の様子が実にリアルに伝わり、明日は我が身と思知らされました。



紙芝居を上演する長沢さん

5月23日福井地裁より「原発は人格権を奪うもの」と、大飯3・4号機の運転差止めを命じる画期的な判決が出されました。しかし安倍政権・電力業界は「安全性が確認された原発は再稼働する」とあくまで原発を再稼働しようとしています。

フクシマ・チェルノブイリの現実を直視しましょう。事故被災者の支援と交流を強めましょう。原発の再稼働を許さず、フクシマを核時代の終わりの始まりにするために手を取り合しましょう。

【佐々木さんの講演】

福島に生きる

<除染をして幼稚園を再開>

妻のおじさんが、ウクライナの医療支援とか除染の支援をしていたので、そのおじさんに電話して「どうしたらいいんだ」と聞いたら「除染をす
るしかない」ということでした。幼稚園を再開していいのかどうかも分からなかったんですけど、除染をきちんとやるまでは子供達は通わせられないということで、保護者の人達に「幼稚園はまだ入園できません」と言っていました。でも親御さ

んの仕事もあるし、子供たちを預かってほしいということもあって、行政は除染をしてくれないので、一応3月の末くらいから僕らの仲間で除染を始めました。住居を解体して、土を削ったり、屋根を洗ったり、結局、屋根は剥がさなければいけないことになりました。5月末までかかって除染をして、それから幼稚園を再開しました。

<国は国民を護らない～考えつく限り子どもを被ばくから護る>

原発事故が起きて僕が分かったのは、国は国民を守らないのだなということです。福島の子供達の命より何か守りたいものがあつたというか。今でもそれは思っています。NPO を立ち上げて活

動をしていると言いましたが、考えつく限りの「子供たちを被ばくから護る」活動をしています。子供たちの口に入る食べ物や飲み物の放射能の量を測っています。また夏休みなどの長期休暇を使っ

て子どもたちを放射線の届かなかったところに連れて行って思いっきり遊ばせる保養活動をしています。それと除染活動です。僕も生まれて初めて除染という言葉を知りました。除染は進まないですよ。国の予算でだいぶ全国からいろんな人が来て除染をされていますが、僕の町だと進捗状況は3割いきません。18歳以下の子供が住んでいる家から順番にやっていますが、3年経ってもまだ順番の回ってこないお宅もあります。そういう順番の回ってこない家や、子供たちの遊ぶ公園の除染をしています。

それと甲状腺の検査ですが、僕は子どもが5人いて4番めの娘が今小学校2年生です。検査を受けた時は幼稚園児でした。甲状腺検査の順番がな

<フクシマは終わったことにされていく>

震災から3年経って感じることは「フクシマ」が終わったことにされていく。総理大臣が「コントロールしています。完全にブロックしています。」と言っている。福島の人達は放射能がコントロールされなくてブロックされないから苦しんでいます。まだ作付もできない、漁師の方は漁ができない、酪農家の方はまだ牧草も食べさせられない状況です。そういう状況の中で総理大臣がそういうことを言うのはどうかと思いますが、言

<3年経った福島の現状>

○子どもの甲状腺ガン・肥満の増加

3年経って福島の問題も状況がいろいろ変わってきています。子ども達の甲状腺検査はずーとやっていて、今年の2月に第5回目の県民健康調査検討委員会の発表があり、甲状腺ガンとガンの疑いが75名。震災前は100万人に一人か二人の病気だと言っていたのが今は75名です。でも、それがニュースや記事になっていかないというこの国は

なかなか回ってこなくて、うちの幼稚園児は次の甲状腺検査が2年後なんですよ。それもあって去年は北海道の西尾先生にお願いして甲状腺の検査をしてもらったりしました。今後どうしたらいいのか全く答えが出ない現状です。内部被ばくの検査も順番待ちでなかなか回ってこない。行政を待っているとどうしても間に合わないというのがあって。本当はきちんと行政が子供たちの甲状腺検査も食品の検査も内部被ばくも除染もやってくれたらいいのですが、なかなか進まない。人も足りないし、お金も足りないし、時間も足りないということで、行政だけではどうしてもできないことを僕らのNPOでやっています。

った以上きちんとやってほしいなと思います。3年経った今でも、毎日毎日400トンの汚染水が流れ続けている。どうなるのですかね。僕は海が心配です。3年間汚染水が流れ続けた海がどうなってしまうのかなと思ってしまいます。福島県では一生海水浴ができないだろうなと思ってしまいます。原発事故が収束していない以上、どうしても先が見えない。そういう福島になってしまっている。

不思議な国だなと。百万人に一人の病気が福島でこんなに出たのにそれがニュースにならない。それが記事になっていくことで困る人がいるんだなと。事実をきちんと報道してくれないことにもどかしさをずーと感じています。

また子ども達はきちんと成長していない。福島県は「肥満日本一」になってしまいました。うち

は幼稚園をやっているので子ども達を毎日毎日見えています。うちの子どもが5人いて、一番下が去年4月に幼稚園に入りました。去年10月に幼稚園の運動会があり、1か月前から走ったり歌ったり踊ったり練習するんですよ。幼稚園に入ったばかりのその子が毎晩寝ながら泣くんですよ。「お父さん足が痛い。足が痛い。」なんだろうなと思ったら筋肉痛なんです。震災後は1回も外で遊ばせてはいない。新潟に避難していたので新潟では外にいましたが、福島に戻ってから全然遊ばせてない。だから筋肉がきちんとついていなかった。それで幼稚園の運動会の練習が始まり毎晩毎晩泣いていました。お陰様で今は毎日走り回っていますが。子供たちが伸び伸びと自由に過ごせる福島でなくなってしまったなど申し訳なさを感じながら、どうしても東京オリンピックに腹が立ってしまいます。体育館作るなら福島に作ってくれ、子供たちが思いっきり遊べる場所を作ってくれと思っちゃう。

去年の10月に運動会をやったのですが、

○なかなか光が見えない

子どもの健康被害もそうなのですが、3年間頑張ってきたのでみんな疲れている。震災関連死ですが、3月11日から去年までの段階で岩手県が4百何十名で、宮城県が8百何十人、福島はダントツの1,600人。福島は災害関連死のほうが津波などの直接死を上回ってしまった。うちのお寺の門徒さんも自殺された方がいます。さっきの映像を作ってくれた方は南相馬のお坊さんです。その門徒さんでは8人です。おじいちゃん、おばあちゃんが農薬を飲んで自殺しています。

放射能は子ども達や僕らの細胞を傷つけてしまうが、それだけでなく、いろんな大切なもの、家族の絆や地域の絆などいろんなものを壊し続けているのが放射能です。なかなか生きる元気が出ない、なかなか光が見えづらいというか。原発事

NPOで二本松の比較的線量の低いグラウンドをお借りしました。そこを除染して、今は線量は0.07マイクロシーベルト/時と震災前と同じ位になってきたのですが、そこで子供たちが運動会をすることができました。テレビも新聞も取材に来ましたが、でもある新聞社が記事にしてくれるなど。なぜかと聞くと「佐々木さんの所のグラウンドが安全だとなるとほかの場所が危険だということになる」と訳の分からないことを言う。次の日、一社だけが記事にしてくれました。運動会シーズンで、ほかの幼稚園も運動会をしますけど、うちの幼稚園以外は全部体育館です。小学校の運動会もそうです。100m走になると校舎から出てきて、終わるとは校舎に戻っていく。そういう様な中学校もあれば、午前中だけ何時間かだけ運動会をする。そういう状況が続いています。除染が進めばだんだん子供たちの遊べる場所が増えていくのかなと思います。3年経った現在でも、子供たちはまだ思いっきり外で遊べない福島になってしまっています。

故が収束していないということもありますけど。僕は幼稚園をやっているので、子供たちをどうやったら護れるか、そればかり考えて活動していますが、それだけでは間に合わなくなって。僕に何ができるかという、何もできないんですけど、やっぱりちょっとへこみます。それが全てじゃなく、未来に向けて一生懸命に歩き出している人もいますが、生きる勇気をなくして自ら命を絶つ人も出ているというのも事実です。明るい話題しか報道してくれないので、福島の実情がなかなか報道されないのが、僕はあちこちで話をさせてもらっています。事実を事実として報道してほしいと思いますが、なかなかこの国は都合の悪い事実を報道してくれないと思います。

○少しでも福島を綺麗にして次の世代にバトンタッチしたい

結構こういう場所に来ると、「お前が子ども達を殺している」と震災当時から言われました。最近あまり言われなくなりましたが。「お前が除染するから福島から避難しないんだ。お前が福島の子ども達を殺しているんだ。」何回言われたか分かりません。言いたいことは分かりますが、どうしてもそこに生きている人達がありますし、避難できない人、そうせざるを得ない人、そういう人が沢山い

ます。その中で僕には除染しないという選択肢は考えられないんです。少しでも子供たちが被ばくしないように、多分僕は一生除染をやり続けるんじゃないですかね。僕が一生除染しても本当の福島に戻ることはないと思いますが、少しでも福島を綺麗にして次の世代に、これから生まれてくる命にバトンタッチしたいなと思っています。

○お母さん達が頑張っている

幼稚園のお母さん達がだいぶ頑張っています。青空市場をうちの幼稚園のお母さん達が主になってやっています。震災当初、お米が食べれず、水



も飲めなかったの、全国から水を送っていただいたり、お米を送っていただいたりして、それを幼稚園の保

護者とか、地域の方たちが分けていました。それを今でもずーと続けています。3年経っても出荷停止になる食べ物があります。山の物は殆ど食べられません。きのこ、山菜、タケノコ、ふきのとう、せり。どうしても山はまだ除染できないので、山の物が汚染されている。だから結構全国から山の物を送ってくれる。そういう物をお母さんたちが一生懸命分けてくれています。

でもお母さんたちもだいぶ疲れてきてしまっていて、これは二本松だけじゃないんですけど。震災直後、福島県内あちこちで、お母さんたちが子

供たちの命を護りたいということで、いろんな形で立ち上げて動き出しましたが、だいぶ分裂したり対立したり消滅したり。そういう状況になってしまっています。うちの幼稚園のお母さんたちは何とかへこみながら頑張ってくれていますが。お母さんたちの力はすごいですね。震災があって、お母さんたちの強さっていうか美しさっていうか、子供を思う、我が子を思うお母さんたちの思いにはかなわないなと思います。福島では子供たちに首から積算線量計というのを下げて生活して、毎日どれくらい被ばくしているかを測ります。二本松は5月から測るんですけど。行政は当初はその数値は教えないと。数値が機械には出ないですよ。行政に返すと、どここの誰ちゃんは何ミリシーベルト被ばくしているというのが分かるんです。それを当初教えないってことだったので、お母さんたちが怒っちゃった。自分の子どもがどれだけ被ばくしているのかきちんと教えてほしいと。僕もお母さん達と二本松市に行きました。最初は不安を煽るようになるから教えないと言っていたんですが、何回か行ったら、今は郵送で教えてくれます。学校給食も当初は測ってなかった、でもお母さん達がきちんと測ってくれということで、学校給食を測りだしました。学校の除染もね。二本

松だけではないと思いますけど、特に僕の周りのお母さんたちが頑張っています。お母さん達がいなかったら変わっていないだろうなってこともあります。僕はお母さんたちがこの福島を変えてくれるんだらうと密かに期待しています。そういうお母さんたちも、エネルギーはすごいんですけど危ういんですよね。ちょうど1年前、去年の3月、僕の町でも殺人事件があつて。卒業式の前の

○子ども達を護りたい～3年間考え続けて

甲状腺検査の結果が去年から戻ってきていますが、小児甲状腺ガンではなくても、しこりがあったり嚢胞があったりする子どもが多い。うちの幼稚園でも一人卒園児が小児甲状腺ガンで手術しました。ガンでなくても嚢胞があるとかになると、お母さんたちはどうしても自分を責めてしまう。子供を病気にしてしまった、被ばくをさせてしまったということで自分を責める。3月15日に僕の町に放射能が降ってきたのだそうです。目に見えないから分からないですよね。痛くもかゆくもないし。3月15日は県立高校の合格発表がありいろんな手続きもあつたけど、余震がひどくて校内でできなくて、発表も手続きも全部外で行ったんです。みんな何時間も外に並んでいた。最初にも言いましたが、水が止まっていたんで水を汲みにみんな並んでいたんです、二本松のあちこちの給水ポイントに給水車が来てくれて、そこにポリタンクを持った人たちが並んでいたんです。でも放射能は降っていて。オムツもなくてミルクもなかった。だからどこそこのドラッグストアでオムツが買えます、ミルクが買えますとなったら、みんな並んだんですよね、小さな赤ちゃんを連れて。そこにも放射能が降った。だからお母さんたちは、なんであの時にミルク買いに行ったんだらう、オ

日に6年生の男の子をお母さんが殺しちゃった。愛情ってちょっと危ういなって。ちょっと間違ふと人を殺してしまう。エネルギーが強ければ強いほど曲がった時に大変なことになるというのがあるので、お母さんたちの子供たちを護りたい思いがなんとか曲がらないように心していけたらなと思っています。

ムツ買いに並んだらうと自分を責めるようなことになってしまっています。お母さんたちが悪いわけではないのに。放射能が降っていると教えなかった国を僕は許せないんです。そういうこともあつて、被ばくせずに済んだ人たちが被ばくするようになってしまいました。

僕にできることはたかが知れていますし、僕にできる事は何かと3年間考えています。福島の子ども達を護りたいとか、そんな大そうなことではないんです、本当は。僕には妻と5人の子どもという大切な家族がいて家族を守りたいというのが僕の原点です。それは3年間変わらずにいます。でもやっぱり家族だけで僕が生きているわけではないので、どうしても幼稚園の子ども達やお寺の門徒さんやそういう人たちの関わりの中で僕は生きていますから、そういう人たちを無視することはできませんが、僕の原点は家族を守りたい。でも情けないなと思いつながら守れない。子ども達の尿からも放射能が出ましたし。できる事しかできない。3年間考え続けていますが、答えは全く分からない。何が正しいのか、何が間違っているのか・・・全然分からない、今でも。でも何をしたらいいのか、何をすべきなのか、今もずーと悩んでいます。

○放射能・原発事故で奪われたものはそこに生きている人の人生

悲しいことに、今も避難生活をしていて故郷に帰れない人が福島で13万人か14万人います。僕の町にも浪江町から2千人以上避難をしてきています。今はどうなのかな、よく分かりませんが。浪江町の仮役場が二本松にあって浪江の人たちはだいたい二本松に避難して来られていました。二本松の人達は良く言わないんですよ。「おめえら金貰っているんだべ。」原発事故が起きて被害を被った人達が沢山いるけど、どうしても補償がおりる人達と、おらない人達がいる。僕の地域は50km以上離れているので一銭も補償が入らないですよ。避難している人たちは補償が貰えるから「あいつらは毎日パチンコやって毎晩酒飲んで。」そういうことばかり二本松の人たちは言っていました。僕もそう思っていました、実はね。でもしょうがないですよ。二本松に避難してきたって仕事もないし、あんな仮設住宅で仕事もない、時間はある、故郷に帰れない、でもお金は貰ってる、そうしたら酒も飲みますよね。そうしたくなる状況があるんだと思います。でも一銭も補償を貰わない人達はなかなかよくは言いません。そんな悲しい状況もあります。

僕の後輩が電気屋さんをやっていますが、そいつと久しぶりに飲んだんです。浪江の人たちも、特に子供のいる人たちは仮設住宅から借り上げ住宅に引っ越している人が多いんですが、そこに去年の夏前かエアコンの取り付け工事に行った。浪江の人たちがそこに住んでいて、電気工事だから家の中に入るんですが「エアコンの工事に来ました」と言ったら、父ちゃんは飲んだっくれているし、娘は二人いて、一人は夏なのに炬燵に入ったままです。とテレビを見ていて「お邪魔します」と言っても返事もしない。もう一人の娘さんは小学校くらいで、寝たきりのおばあちゃんに何か食べ物

を食べさせている。津波に遭って、お母さんは津波に流されていない、父ちゃんは飲んだっくれているし、そういう状況を見て、僕の後輩は「お金を貰っても幸せではない」と言っていました。僕もそう思います。お金も大事ですけどね、お金では取り戻せないのでからね、奪われたものは。放射能・原発事故で奪われたものは、そこに生きている人の人生ですね。歴史も文化も全部ひっくり返した人生を奪ってしまっている。おじいちゃん、おばあちゃんが自殺するのも何となくわかります。

僕も月に何べんか南相馬市の仮設に行ってお茶を飲んだりしてるんですが、3年経ってもまだ何もやっていないんだというおじいちゃん・おばあちゃんがあります。線量が高いのでお孫さんたちは避難しているわけだから戻ってこない。あと、作付が出来ない。福島は田舎で自然と共に生きてきたんですよ。魚釣りして、山菜取りして、野菜とか作って。そういう生き方を奪われているから元気が出ない。南相馬市で去年試験的にお米の作付したんですよ。そこの作付した農家のおじいちゃんとお話しをしていたら、行政に言われてしょうがないから作付したけど孫に食わせられない様な米は作りたくないんだ。きちんと除染して綺麗にしてから作りたいと。結局試験的に作付したけど、殆どお米にセシウムが入っていました。基準値越えのセシウムが入っていたのも何検体もありました。そのおじいちゃんが「農家の楽しみは取れたての野菜を家族に食わせることだ。美味しい米を家族に食わせることだ。それができないなら農家なんかやりたくねえ」と。

取り戻さなければならないものが沢山あって。いろんな人たちが一所懸命もがいていますが、なかなか先が見えないような福島になっていると思います。

<早く子供たちを護る法律を>

僕も去年チェルノブイリ原発事故の被災地に行ってきたんです。ベラルーシではなくウクライナに行ってきました。やっぱりチェルノブイリでしか分からないことがあるだろうなと僕は思っていたし、福島が27年目がチェルノブイリかなと思いつつウクライナに行ってきました。福島でできていることとできていないこと、ウクライナでできていることで福島でできていない事があります。福島で早急にやってほしいのは法律です。子ども達を護る法律がきちんとできていないですし、中身もできてないです。どこまで子供たちを護るのかきちんと定まっていない。ウクライナでは法律ができていてからきちんと子どもたちの健康管理もできるし、貧しい国だから日本ほどではないと思いますが、内部被ばく検査も甲状腺検査もずーとやっているし、子どもたちの保養をきちんと国がやってくれている。日本は法律ができていないし、国が保養に動き出さないから、民間の団体が子供たちの保養を一生懸命やってくれていますけど限界があります。助成金も保養事業に対しておなくなってきている。僕らは北海道に幼稚園で行ってますが、最初の年はフェリー代を北海道庁が出してくれたり、国から助成があったりしたけど、もう全然助成金がおなくなってしまいました。民間では難しいのかなと思いつつながら。国が子供たち

<震災で問われている生き方>

原発事故が起きて僕が感じるのは、何回も言ったけど、国は国民を護らないですよね。国益は護るけど。この原発事故がなかったら、一部の人の犠牲の上に成り立っている、平和だったり、豊かさだったんだと僕は気付かなかつた。福島の問題だけではないんですね。様々な社会問題があって、沖縄の問題も水俣の問題も、いろんな人たちの犠牲の上に僕らの豊かさがあったんだなと感

を護る法律を早急に作ってくれないかなと思います。

それとウクライナに行ったらちょっと光が見えたというか、チェルノブイリの被災地に行ったら、原発事故と放射能と向き合ってる所懸命に生きてる人がいたんですね。そういう人たちがいたことが僕はすごい光だなと。福島の人には諦めたくなくなっちゃいますよね。「しょうがねえべ」。福島は広いんです。北海道が一番広くて次に岩手県。その次が福島県なんです。福島県は7割が山ですからね。「こんなところ除染できるわけねえべ。」みんな諦めています。「しょうがねえべ、ここに住むしかねえんだ。」僕は諦めたくないですけどね。でも諦めてしまうような状況が作られているなということも感じてしまいます。

日本政府も再稼働を目指して突っ走っていますね。福島の事故はなんだったのかな。未だに苦しんでいる人たちがいて・・・。どういう国なのかなとビックリしてしまいます。またどこかで福島が繰り返されるのかなと思うとやりきれないなと思います。だからこそきちんと福島の事実を報道して行ってほしいと思います。なかなか再稼働したい人たちは、福島が黙っていれば、福島さえ黙っていれば、というような状況になってしまっています。

じます。だいたい僕はノホホンと生きてきたんだなと、原発事故があつて思い知らされたというか。原発の事なんて考えたこともなかったです。社会科見学でも行きましたね。「五重の造りになっていて、絶対安全です、クリーンなエネルギーです、未来のエネルギーです。」福島の子供達も皆思っていたんじゃないですか。そういう風に刷り込まれていましたからね。でもあんなに簡単に木

端微塵に吹っ飛んでしまいました。震災で僕の生き方が問われているような気がします。僕は無関心で生きてきたから、僕の無関心さがこの社会を支えてきたし、54基も原発が立つような状況を作り出したのは僕の無関心の生き方なんだろうなと思いました。やっと原発事故で気づかされたというか。僕がどういう風にこれから生きていくのか問われている気がします。

震災後、家族との時間もだいぶ少なくなっていました。家に帰ったら除染するし線量を測りに行くし、あと、全国あちこちにお話をさせてもらいにも行くし、なかなか家族との時間も取れない。3年経ったから少しずつは家族との時間を取り戻したいなと思っています。幼稚園と小学校

<とにかく福島の実情を知ってほしい>

このままだと僕はまたどこかでフクシマが繰り返されると思いますし、世界中にも原発があるんでしょし、またどこかの国で、フクシマが繰り返されて、そこに



に生きていくという人が奪われていくということが起きるのかなあと。なんで人間は過ちを繰り返すんですかね。それに3年で忘れてしまうし。福島の人たちがどう言っているか知ってほしいん

ですよね。原発事故で何が起きたのか、そこに生きている人たちがどういう生き方をしているのか、なかなかそういう人たちの苦しみや悲しみが報道されませんが。関連死もそうですし、自殺が増えていることも。そういう事実を僕はまず知ってほしい。事実を知ったから変わるかどうかは分か

2年生の子が「お父ちゃんいつ帰ってくるの」って毎回言ってくれるし、その子供たちとどうにか楽しく過ごしたいと思いますが。子ども達は、毎日除染したり、線量を測っている僕の背中しか見ていないし、週末になったら県外に遊びに行くような状況で、夏休み冬休みもそうです。子供たちはどう思っているんだろうと思いつつ。でも何かこう、今は寂しい思いをさせていますけど、僕が子どもたちの命を護りたいからやっていたんだと、どこかで大人になって気づいてくれる日が来ると思っているし、福島だからこそ命を大切に子ども達になってくれるんじゃないかなと密かに期待しています。

りませんが。やっぱり今までの僕の生き方みたいに無関心でいて、無関心でいた方が楽ですからね。無関心でいた結果が今の福島ですから、とにかく知ってほしいなと思います。

原発が無くなったらいいなと思うけど、そう簡単に無くなさそうなんです。社会を見ていると。どうしたらいいか僕にも分かりません。でも毎日毎日400トン汚染水が太平洋に流れ込んでいて、3年経っても止める術がないんだって。後何十年汚染し続けるんですかね、海を。僕は海がもたなくなっちゃうんじゃないかなって、思います。

それと、うちの幼稚園の保護者も未だに原発に通い続けています。「地球を守って来る」と息子に言ってるそうです。3000人くらいですかね、毎日被ばく労働をしている方達。その人たちが毎日毎日汚染水の管理や水をかけたりしてくれなかったら放射能は止まらないんですよ。そういう人たちが被ばく労働しているから何とか福島が今・・よくなっているとは思えないですけど、何とかこ

う。見えないですよ、福島原発が大変なことにならないように、3年間被ばくし続けてそこで頑張っている人たちがいるということは。全国から来ていますけど6割が福島の人たちです。被ばく労働抜きに原発というシステムは成り立たないということも見えてこないですものね。要するに

<原発は命の問題>

一応最後に、僕こう見えてもお坊さんです。去年就職になったばかりのほやほやです。やっぱり原発は命の問題だと思います。どうしても経済の問題にすり替わってしまいますが。放射能は命を蝕むから駄目なんです。なんかちょっと僕の思いと、ずっとけていく人たちも結構いて。フクシマが悲惨なら悲惨なほど原発が止まるんだという発想の人もいたりして・・・。「福島で奇形児が生まれています」って。ひどい海外のテレビ局は鼻血を出している映像を撮りたいんだと。うちの幼稚園では見たことはないんですけど。高線量の地区に行ったらあるのかも分かりませんが、うちの幼稚園では僕は見たことないので分かりませんね。僕はどうしたら福島の子どもたちが病気にならないか、健康になれるのか考えるけど、同じ原発を止めたいと考える人でも、福島が悲惨なら、福島が病気になれば原発は止まると考える人もいるんだなと思いました。

浄土真宗というところの坊主なんですけど、親鸞聖人という方が開いた宗派です。親鸞聖人は人間のことを凡夫だと言います。愚かな人、自分のことを愚息と名乗っています。親鸞聖人の人間の見方は過ちを犯すのが人間。そういう視点が浄土真宗の人間を見る視点です。人間は過ちを犯す。繰り返す。だから今どう生きるかを考えなければいけないと浄土真宗は言います。親鸞聖人は、むざんき無慙愧は人間ではない、無慙愧は畜生だと仰って

爆発しなくたって被ばく労働はしなければならない。そういうこともなかなか都合の悪いことは伝わってきません。未だに収束作業を頑張っている人たちがいるということを知ってほしいと思います。

います。慙愧というのは心から謝る、心から反省する、心から反省しない者は人間じゃない、畜生だ。その言葉が最近ちょっとすっきりくるというか、これだけ毎日毎日海を汚して、公害問題もそうですけど。幼稚園児はアレルギーの子ばかりです。花粉症もそうだし、人間が豊かさの先に作ってきた今の社会はどうなんだろうということ僕らは考えなければならない。どこまで行っても満足しない。僕の家には車が2台あり、テレビもあってエアコンもあって、でももっと豊かになりたい。そういう人間の豊かさの求め方が問われているんじゃないかなという風に思うし、僕はこれから生まれてくる命に謝らなければいけないなと思います。こんな世界にしてしまった責任は僕たち大人にあるのではないかな。反省、御免なさいというところから僕はスタートしたいなと。親鸞聖人の言っている慙愧する心。心から反省する、何に反省するかというと、仏教は一つだけなんです。命に対してです。未来の命に僕はごめんなさいというところから、歩み出したいと思うんです。でないとまた繰り返してしまう。海を汚して、大地を汚して、命を大切に出来ない社会を作ったのは僕です。だから情けない、ごめんなさいというところから歩み出す世界があったら、繰り返さないのではないかなとちょっと思います。でないともう繰り返しそうですから。

フクシマの問題はそう簡単に終わることでない

だろうと思います。原発が収束しない以上、チェルノブイリを見ててもそうですけど、30年かかるかな。でも諦めてはいないので、少しでも子供たちが被ばくしないように、少しでもきれいな福島にしてこれからの命にバトンタッチしたいなと思っているので、僕は変わらず死ぬまで除染

するのかな。僕一人の力ではどうしようもないんですよ。原発の問題もいろんな人の支援がないとどうしようもない福島になっています。心の問題もそうです。どうかフクシマを忘れないでください。福島の子どもたちのことを助けて下さい。ありがとうございました。

(会場からの質問に答えて)

<福島で生きている人間の苦しみを想像してほしい>

*山下さんなんかは、「笑っていれば放射能は影響ない」というような話しをしました。田舎の人たちが、テレビで政治家が「大丈夫だ」と言っている。偉い大学の先生が来て大丈夫だと言っていたら、それが危険だなんて、おじいちゃん、おばあちゃんたちは思えないんですよ。震災の年も、毎年、毎年、干し柿を作ってくれるおばあちゃんがね、僕の家干し柿を持ってきてくれました。干し柿はその当時、出荷停止だったけど、おばあちゃんは作ったんですね。900ベクレル/kgくらいありました。何の悪意もないんだもの。震災前と同じ暮らしをして、同じ関わりの中で、僕に干し柿を持ってきてくれて。僕は、「おばあちゃん、これはお孫さんに食わしたらだめだよ」って言ったら、おばあちゃん泣いちゃったけど。そういう福島ではない人間から見ると、福島の人視点とちょっと違うような気がします。福島の人たちが毒を作りたいわけじゃないし、放射能をばらまきたいわけじゃないんですね。ガレキの問題も、だいぶ騒がれましたけど、あれは宮城、岩手のガレキです。福島のガレキを外にという話ではないのだけど。僕ら福島の間は、ガレキを外で焼却してほしいなんて全く思わないし。だから、福島をそうさせてきた圧力みたいな変な力があります。僕は一所懸命そこに抗おうとしているけど、なかなか、その福島を終わったことにする、なかったことにする力は強いですからね。マスコミも含めて。だからなかなか難しいなと思います。

*福島のお母さんたちは、震災の年かな、インターネットを見れないって言うお母さんたちが増えました。やっぱりインターネットで「放射能」で検索していくと、「なんで避難させないんだ」とか、「福島はもう住めない地域なんだ」とか、そういうのがいっぱい出てきて。お母さんたち、放射能のことは知らないからどうしたってインターネットで調べるしかないんだけど、調べて行くと「おまえらは子ども達を殺す気か」という言葉にどうしてもぶつかっちゃうんです。だからお母さんたちがインターネットを見れないんですね。悪意はないんでしょうし、福島の子ども達のことを思っただけの発言なんだろうけど、そこに生きている人たちからしたら、ちょっとなんとかしてほしいな、という気はします。やっぱりそういうので苦しんでいる人、いっぱいいますから。難しいですね。善意が人を苦しめるし、みんな良いと思って、正しいと思ってやっていることですからね。でも、そこで生きている人間の苦しみて何なのかなってイメージしながら発言してほしいなというふうには思います。

佐々木道範さん プロフィール

1972年生まれ 真宗大谷派眞行寺住職 同朋幼稚園理事長 NPO法人TEAM二本松理事長
東京電力福島第一原発事故以降、食品の放射能測定、子ども一時保養事業、内部被曝検査、除染等の子ども達を放射能から護る活動を続けてい

チェルノブイリ原発事故28年の被災地訪問報告-その1

事務局・振津かつみ

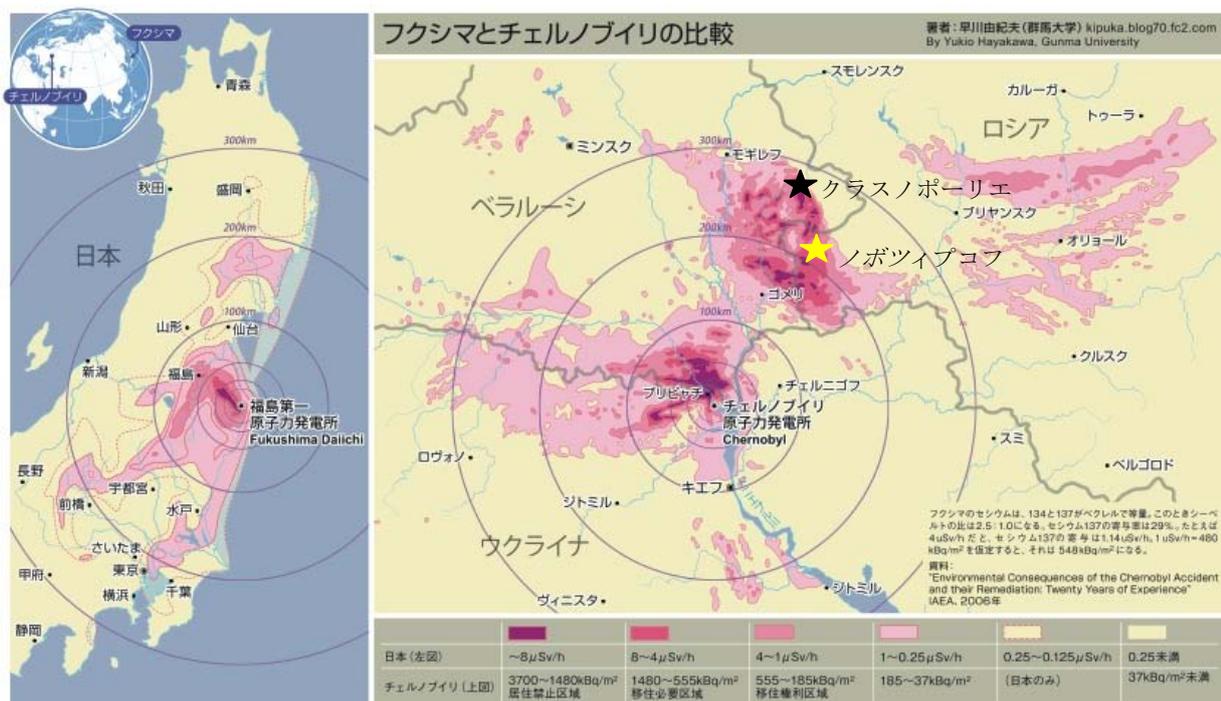
訪問行程：

- 4月 8日：関空発、モスクワ着。夜行でモギレフへ。
- 9日：早朝モギレフ着、車でクラスノポリエへ。
クラスノポリエ交流（障害者リハビリセンター、ソヌチカ幼稚園、病院）
- 10日：クラスノポリエ交流（障害児リハビリセンター、子供保護施設、学校）。
- 11日：チェリコフ交流（幼稚園、子供保護施設）。ミンスクに移動。
- 12日：ミンスクのマリノフカ滞在。「移住者の会」交流。EASのメンバーと合流。
- 13日：EASのメンバーとともに「移住者の会」交流、聞き取り。
- 14日：ミンスク市内見学（チェルノブイリの事故処理作業員慰霊の教会。汚染地から収集した古家具や道具の展示室のある民族博物館。）
電車で、ゴメリ経由ノボツィプコフへ。
- 15日：NGO「ラディミチ」訪問。事故処理作業員と会談。
- 16日：「アート教室」訪問。クリンツィの学校訪問。事故処理作業員と会談。
ノボ・キャンプ見学。
- 17日：夜行でモスクワ移動。
- 18日：朝、モスクワ着。夕刻、モスクワ発、機中泊。
- 19日：関空着

今回届けた支援

資金援助	マリノフカ（「移住者の会」）	1000	ドル
救援物資購入	マリノフカ（「移住者の会」）	300	
	クラスノポリエ：ソヌチカ幼稚園/成人・子どもの障害者センター/学校	1000	
	困窮家庭の衣類購入	200	
	チェリコフ：プラレスカ児童保護施設	300	
		1800	ドル
	「子ども元気」マリノフカ	1000	ドル

[1ドル=105.4円。上記の他に、昨年の「ノボ・キャンプ」参加の交通費：2,400,000ベラルーシ・ルーブル（約24000円）を支払った。クラスノポリエとチェリコフについては、一昨年から「子ども元気」資金の代わりに「ノボ・キャンプ」への参加支援を増やす方向で支援している。]



改訂版 2011年12月9日(初版4月15日)
この地図の作成には、文部科学省科学研究所補助金「インターネットを活用した情報共有による新しい地学教育」(番号23501007)を使用しました。
地図製図：新藤俊子 (TUBE graphics)

紙面の関係上、報告は何回かに分けてお伝えします。今回は、クラスノポリエ地区の人々の被ばく状況と健康状態について多少なりとも話しを聞くことができた、幼稚園訪問と衛生局長さんの話し、またクラスノポリエ訪問全体の「印象」に限って報告します。

クラスノポリエの放射能汚染

クラスノポリエは、前ページの地図にあるように、原発から250kmも離れていますが、地域がありました。そのような地域では除染が行われましたが、結局、事故後5年目に新たな「チェルノブイリ法」ができ、この高汚染地の人々のほとんどが移住することになりました。そのためクラスノポリエ地区の人口は半減しました（現在、1万人余）。事故後28年間にわたって人々が住み続けている地域は、福島でいえば「中通り」と同じくらいの汚染レベルで、「チェルノブイリ法」で「移住の権利」区域（175k~555kBq/m²）と定められている汚染レベルも含まれています。たとえ法律には「移住の権利がある」と書いてあっても、実際には他の地域に移る人々は数%だったそうです。

ソヌチカ幼稚園

ソヌチカ幼稚園は1993年に初めて訪問してから、ずっと交流を続けています。今の園長先生は3代目です。現在216人の園児がいて、12グループある、地区で一番大きな幼稚園です。今回は、支援金で文房具を買って贈りました。

この地区は「汚染地域」（37k~175kBq/m²）なので通園費の半額控除があり月額26万ルーブル（約25ドル相当）です。教員などの平均的な月給が250ドルくらいなので、子どもの多い家庭ではかなりの負担です。現在、この幼稚園でも、経済的な問題など様々な理由で「困難」を抱えている家庭が7家族（子ども11人）いるとのこと。ベラルーシでは、3歳までの子どもがいる家庭に

3分の1くらいが555kBq/m²以上の高汚染地域（福島の旧避難区域に相当）にな
中には、一度は移住したけど戻ってきた人もいました。「移住の権利」区域レベルの汚染地では、避難に対する公的支援が事実上は、ほとんどなかったからです。遠方に頼れる親戚がいたり、移住先でも仕事に就けるような人々は移住できましたが、多くの人々は、汚染地で放射能に気をつけながら暮らすことを選択せざるを得なかったそうです。事故から28年経って、地域の空間線量は事故後数年頃の10分の1くらいだと言われています。（線量計で測定すると、クラスノポリエの街中ではほとんど0.1μSv/h未満です。）

は「子ども手当」200万ルーブルが支給され、また2~3人目の子どもの出産に際しては「母親手当」（1500ドル相当）が支給されるそうです。

最近の園児たちの健康状態について園長先生に聞いてみました。幸い去年は、子ども達の健康状



支援として贈った文具と、園長先生たち。

態は比較的好かったようで、「第一健康レベル」のグループ（ほとんど風邪などもひかず、元気にしている）が60-70%だったとのこと。ベーラさんの話しでは、「第一健康レベル」のグループは、通常は20%以下なので、けっこういい状態だったということのようです。「第二健康レベル」（風邪や扁桃炎など、急性の一過性の疾患に罹患した）の子どもが30%くらい、「第三健康レベル」（先天性心疾患、気管支ぜんそくなどで、医療機関でのフォローが必要な慢性疾患を持つ）の子どもが10%以下だったそうです。

先生たちは子どもたちに「森の木の実やきのこ

衛生局長さんの話し

病院で、衛生局長のサーシャさんと話しをしました。衛生局では、地区の食品などの放射能測定とそのデータ管理、また病院と一緒に、地域の人々のホールボディカウンターでの体内セシウム量の測定とデータ管理を行っています。サーシャさんに、昨年の測定の結果をお聞きしました。「2013年度は、クラスノポリエ地区で収穫された食品のほとんどが『基準値』以下だった。しかし、野生のものは依然として基準値を超えるものがある。森で採れるきのこは35%、木の実は7%、野生動物は25%が基準値（きのこ、野生動物は370Bq/kg、木の実は185Bq/kg）を超えていた。ヴェドレンカ村（555kBq/m²の境界くらいの汚染レベルで、事故から5年目の法制定で移住の対象地域だったが、地域住民が移住しない選択をした村）で、昨年、基準値を超えた牛乳が2件あった。値は110~115Bq/lくらい。その乳牛については、飼料を替えるなどの対策を講じた。」とのこと。28年経っても、汚染した森の野生の動植物には放射能が「基準値」を超えて検出され、長期にわたる

は食べないようにね」と、教えているとのこと。汚染地ということで、これまでは年に一回は、小児科だけでなく、耳鼻科、歯科、等々、それぞれの科の専門医が詳細な検診をする機会があったのですが、この1年間は、地域の病院に現役の常勤小児科医がいないなど医師不足もあって、詳細な検診ができていないそうです。また、この2年間は、幼稚園からまとまって子ども達を「保養」に連れていくことができていないと、園長先生はこぼしておられました。理由はちゃんと聞けませんが、資金不足でしょうか…国から「保養」の指示がないようです。

モニタリングが必要だというのが現実です。

ホールボディカウンターの測定結果については、子ども達では「基準値」（1mSv/年）を超えたケースは一例もなかったとのこと。（以前に入手した事故後5~10年頃のデータでは、クラスノポリエ地区の子ども達の10数%が「基準値」の全身で3700Bqを超えていた。）「昨年は、基準値を超えたのは大人2人のみ」だったとのこと。今年の1月以降4月までに、すでに400人の住民がホールボディカウンターによる測定を受けました。その手書きの「記録ノート」を見せてもらいました。結果はコンピュータのソフトですでに「年間被ばく線量(mSv)」に計算された値が記載されているので、実測のBq表示でどのくらいの量のセシウム137が体内にあるのかはわからなかったのですが、ざっと「記録ノート」を見る限りは、ほとんどの人に、年間被ばく線量に換算して0.1mSv/年未満の数字が記載されていました。やや高めめの0.1mSv/年を超える人（その中で高い人でも0.5mSv/年は超えない程度）に注目すると、職業に特徴があり、

森林で働く林業労働者や猟師です。林業労働者や猟師は、野生動物やきのこを摂取する機会が多いためかもしれません。家族の方々のフォローも必要ではないか、もし子ども達も同じものを食べていたら…。クラスノポリエのように、森林の多

チェルノブイリ汚染地に28年間暮らして…

今回クラスノポリエで、訪問先の学校や幼稚園の先生などと話していると、チェルノブイリ事故は、この被災地の人々にとっては、もう「過去のこと」になっているのではないかという印象を受けました。私自身が、事故から3年経っても様々な問題が山積みになっている、今の福島の現状とつい比較して見てしまうので、よけいにそのように感じてしまったのかもしれませんが。

私がチェルノブイリの被災地を初めて訪問したのは、事故から5年目の1991年で、やっと30km圏外の高濃度汚染地（福島の飯舘村レベルの汚染地）からの移住が決まった頃でした。被災地の人々は、試行錯誤で苦悩しながら、なんとか見えない放射能と向き合い、それを乗り越えようと努力していた時期だったのを思い出します。除染、子ども達の健康を護ろうとする医師や教師の努力、移住に伴う悲しみ、増え始めた甲状腺ガンへの対応の苦悩…。20年以上にわたる交流の中で、私たちの親しい友人だったチェルノブイリ被災者の病气と死も経験しました。被害を過小評価し、否定するIAEAなどの国際機関とのせめぎ合いの中で、翻弄されながら、自分たちの家族、地域の人々の健康と命と生活を守るために努力してこられた被災地の方々とともに、私たちもこの20年間活動をしてきました。事故3年後の福島での人々の苦悩と混乱、矛盾は、チェルノブイリのヒバクシャも経験してきたことです。「なんとかその時期を自

い田舎では、地域の人々を被ばくから護るために、事故から28年経っても食品とホールボディカウンターによる体内セシウムのモニタリングが重要なのだなど改めて思いました。

分たちは乗り越えて、28年暮らしてきて今がある」という思いも感じられました。

クラスノポリエで、人々に事故後数年頃のことを聞くと、当時成人していた人たちは「大変だったわ」「妊娠中だったので、汚染食品のことは特に気にしていた」など、その経験を話してくれます。「でも、注意していた人も、あまり気にせず食べてしまっていた人も、今では両方とも元気で暮らしている。」「今から思えば、汚染地の人々を遠く離れた都市に移住させるのではなく、（低レベルの汚染地域であっても）故郷に近い地区に移住させた方がよかったのではないかと思う。特に、高齢者にとっては。」などの話しも今回、聞かれました。事故当時、まだ子どもだった人々も、すでに30～40歳代。「きのこを食べたらダメ」「ビタミンをちゃんと取りなさい」とか言われ、毎年、保養に行ったりしたことを思い出すけど、当時のことは、すでに「昔の話」という感じ。学校では、チェルノブイリ事故後20年以上経ってから生まれた子ども達が、自分たちの故郷が経験した「歴史上の悲劇」としてチェルノブイリを学んでいます。「私たちは28年間も、汚染地で暮らしてきたので、その状態に慣れてしまったのかもしれないわね」と、ベーラさんも言われていました。

でも現実には、クラスノポリエ地区には未だ人々が住めない地域があり、立ち入りを禁止されている森があります。食品汚染や体内セシウムの

モニタリングは、今も続けなければなりません。学校で子ども達は、「生活安全」の課目で、地域の汚染状況、被ばくから身を守る生活上の注意を学びます。28年経っても、被ばくによる健康被害の全体像が明らかになるのは、むしろこれからかもしれません。低線量の慢性被ばく、特に線量推定が難しく、人口の移動もある被災地住民の健康影響調査には、さらなる研究が必要でしょう。

一方、ベラルーシでは着々と原発建設が進んでいます。ルカシェンコ大統領の「専制政治」の下

で、「政府の政策には反対できない」と、公の場で人々はこの問題をあまり議論しません。「でも、チェルノブイリ事故の時も、私たちは原発は大丈夫…と信じていて、こんなことになったのよね。」というクラスノポリエ人々の言葉に、「繰り返してはいけない」という思いが伝わってきました。

チェルノブイリと福島、それぞれの特異性と普遍性をちゃんととらえ、歴史的な視点も持って、両者をどう結ぶか…考えねばと思います。

【集会に参加しての感想】

「チェルノブイリ原発事故28周年の集い」に参加して

藤井寺在住 僧侶 高間重光

お誘いを受けて連れ合いと参加しました。用意された席はほぼ埋まり盛会でした。佐々木道範さん、そして振津かつみさん、お二人のお話への感想を少し書いてみます。

佐々木さんのお話を聞くのは、同じ宗門ですの二度目でしたが、以前とは少し変わられて、ずいぶん自然体になられたように感じました。三年余の年月がそうさせたのでしょうか。どのような取り組みでも、持続していくことは容易ではありません。観念的な関わりでは持たないということでしょうか。大切な妻や五人の子どものために頑張っている、補償金の受給の有無で対立が生まれているし自分の中にもその心はある、というような言葉は正直だなあと思いました。またそれゆえに、「この国はいのちを大切にしようとしなさい」「民間

の取り組みには限界がある、早く子どもを護るための法律を作ってほしい」という発言など重く響いてきました。

振津さんのお話からは、地道な交流と取り組みの大切さを教えられました。最初のころに出会った子どもさんが今ではお母さんになっておられるという報告もありました。また援助も、大規模なものではないけれども、具体的にこまめに出来る範囲での取り組みを継続しておられるとのことでした。そこには、今までの長い間の取り組みの貴重な経験や苦勞が生かされているのでしょうか。けれどもこれからは、チェルノブイリ原発事故に遭遇しこれまでの28年間の苦難の道を歩んでこられた方々に、福島がそして日本の我々が多くの導きを頂かねばならないということなののでしょうか。

チェルノブイリ事故 28 周年のつどいに参加して

吉川 純香

原発事故といえば「チェルノブイリ」が象徴的な言葉で、私は対岸から眺めていただけだったけれど、東日本大震災後は「フクシマ」が世界で最も注目を集める原発事故の象徴になってしまった。そしてロシアとは比べ物にならないこの狭い日本では、福島からどんなに離れていようとももはや放射能汚染とは無関係ではありえなくなったと思っている。関西で住んでいても、雨にはできるだけ濡れないようにし、魚介類は海の放射能汚染を覚悟で食べている。アメリカ政府は事故直後、自国民に対して 80 キロ圏外への避難指示を出したというのに、今も 30 キロ圏外なら多くの人が避難せずに（できずに？）住むことを可能にしている日本政府の対応とは大違いだ。

「除染」して人々が本当に安心して生活できるようにまで放射能レベルを下げるなんてできるのか？『復興』の名のもとに、福島に住み続けることが美談になり、子供の健康被害を心配して避難を考えたいということを口に出しにくい雰囲気が強くなってきていると聞いている。そんなまず復興ありきのニュースに強い疑問を感じていたので、避難区域ではないが、ホットスポットとなった故郷二本松市に家族と共に残り、除染を続け、幼稚園経営をされている佐々木さんの話には正直違和感もあった。しかし佐々木さんの話には福島に生きる当事者としての本音が率直に語られてい

て心に沁みだ。賠償金をもらう人ともらえない人の間の軋轢、賠償金はもらっても避難し仮設住宅で住む家族の悲惨な現実への思いなど。そしてとどまる選択をした者として徹底的に子供たちの健康を守ろうとする強い決意は、部外者からの批判をはねつける凄さがあると思った。被災した人たちが人間としての尊厳を失わずに生きていくために、どんな援助のあり方がいいのか考えさせられる。

チェルノブイリ報告では約 30 年たってやっと原発事故が過去のものとして語られるようになってきたという現地の方の言葉が印象に残った。福島はまだ 3 年たったばかり。そこに住み続ける人たちの健康にどんな影響が出てくるかまだまだわからない。チェルノブイリの今は、福島の未来に起こりうるいろいろなことを教えてくれると思う。ノボツィブコフの町は飯館村と同じレベルの高汚染地区であるにもかかわらず人口が多いため移住を断念し、ほとんどの住民が住み続けた地区だそうだ。このような被災地のレポートは福島の人たちが今後の生き方を選択するうえで本当に貴重なものになると思う。チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西が今後も地道に活動を続けられることをおおいに期待し、また私自身も協力していきたいと思う。

【アンケートより(抜粋)】

○佐々木さんの報告で印象に残ったこと、意見・感想

- ・ 二本松での取り組みと想い、佐々木さんご自身の言葉でお聞きでき、とてもよかったです。保養に

兵庫県で取り組んでいます、これから更に何をしていたらいいか改めて考えさせられました。近々二本松を訪れたいと思っています。

- ・ お聞きして大変よかったです。本日ここに来させていただき、大変な状況を話していただき、ありがとうございました。
- ・ 除染を続けて住み続けることがいいのか、汚染された土地を去り、新しい生活を始めるべきか、本当に悩ましい問題だと思います。福島の外から批判するのは簡単だけれど、そこに住まざるを得ない人々がいるのは歴然とした事実なので、そこに住み続ける人としての気持ちが少しわかった気がします。
- ・ 「国は国民を守らないんだ」と福島の事故をきっかけに思い知らされたこと。それは福島に限らず、沖縄も水俣も… 無関心がこのような社会を作ってきたとされていることに、私も心から共感しました。そして私も私のできることを（ささやかでも）したいと思っています。福島を忘れないことからです。今日のお話も忘れないための大きな力になりました。
- ・ 原発事故の被害者が、除染をするからという理由で、お前が子どもを殺していると責められたということ。チェルノブイリの被害者の方々と会って、明かりが見えてきたと言葉（が印象に残りました）福島の人たちと十把ひとからげにはできないけれど、疲れているということを感じました。福島と大阪の「温度差」も感じました。
- ・ 周囲の住民のみなさんが疲れているということ、もう放射能のことについて考えたくなくなっているという中で、大切な取り組みをなさっていると思います。
- ・ 現地で残って生活している人の苦しさがよくわかりました。
- ・ すごくリアルで現実的な話でした。もっともっといろいろなところで知ってもらうべきだと、私も思いました。

○振津さんの報告で、印象に残ったこと、感想・意見など

- ・ 長年の交流活動の重みと、国を超えて民間レベルの交流の大切さを教えていただきました。
- ・ 30年は長いですね。30年たってやっこの現実かという感想です
- ・ 28年後の現実を見せていただき、よかった。子ども達が元気でホッとしました（完全ではないでしょうが…）教育現場で伝えられていることも、見習いたいことです。
- ・ ノボツィプコフについてもっと知りたいと思います。
- ・ チェルノブイリに学ぶことを、ずっと交流と支援で発信されていること、今日もいろいろ知ることができました。
- ・ 福島の方が被ばく度は低いのですか。そのところが知りたいです。

「チェルノブイリの日」にちなんで関西電力に申し入れを行いました。

「チェルノブイリの日」の前日 25 日に関西電力に原発を止め、再生可能エネルギーに転換するように抗議し、申し入れを行いました。20 人が集まり、それぞれに持参した申し入れ書を読み上げ、社長に必ず渡すようにと申し添えて広報の担当者に手渡しました。これからも「フクシマ・チェルノブイリを繰り返してはならない」の思いを込め「チェルノブイリの日」に関電に対して申し入れを行っていきましょう。

チェルノブイリ事故 28 周年に際しての関西電力への申し入れ

関西電力株式会社社長 八木 誠 様

明日 4 月 26 日、旧ソ連のチェルノブイリ原発重大事故からまる 28 年が経ちます。チェルノブイリの被災地では今も放射能汚染が続き、人々は放射能の中での生活を余儀なくされています。被災地では今も被ばくを少しでも低減させ、住民の健康を守るための努力が続けられています。

福島第一原発事故から 3 年が経ちましたが、事故は未だに収束していません。事故原因も十分に解明できていません。汚染水の処理もままならず、大量の汚染水漏れが続いています。なんらかのトラブルで燃料の冷却ができなくなった場合には、再び大量の放射能放出という深刻な事態に陥る可能性もあり、不安な日々が続いています。廃炉には何十年もの年月を要し、見通しが立ちません。高濃度の放射線のもと、事故収束のために多くの労働者が被ばくしながらの必死の作業を続けています。

いまだに福島県だけでも 13 万 5 千人もの人々が避難生活を強いられ、元の生活には戻れません。避難者は、事故が収束せず、汚染がまだ残る中での帰還か、生活再建の支援もない下での移住か、等重く苦しい選択を迫られています。また東北・北関東を含む広大な地域が汚染され、放射線管理区域相当の汚染された場所で多くの人々が放射能と向き合いながらの生活を強いられています。除染も進まず、被

災地での問題は山積みです。

チェルノブイリとフクシマの二つの原発重大事故は、その悲惨で甚大な犠牲の上に、原発はひとたび重大な事故を起こせばその被害は長期にわたり、取り返しのつかないこと、そして事故収束は困難を極めることを示しました。

現在、日本の原発は一基も動いていません。今夏も他社からの電力融通や節電などで、貴社も含め日本全国で「原発ゼロ」でも乗り切れると試算されています。貴社はあくまで原発の維持を追求し、大飯原発 3・4 号炉、高浜原発 3・4 号炉の再稼働を目論んでいます。基準地震動の大幅な引き上げとそれに伴う耐震設計の変更を迫られています。また貴社は原発が稼働しなければ電気料金の更なる値上げもちらつかせています。また受電もしていない日本原電や北陸電力に原発を維持させる費用を払い続け、その負担を消費者に押し付けています。

しかし今必要なことは、維持・改修に莫大な経費を要する原発の再稼働ではなく再生可能エネルギーへ転換することです。現に貴社も、電力の需要が伸び悩む中で、電力自由化に向けて競争力の強化に迫られていることを認識されているではありませんか。もう危険極まりなく膨大なコストのかさむ原発にしが見つめるのは止めましょう。

以下申し入れします。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓とし、原発を再稼働せず、全原発の廃炉を決断し、再生可能エネルギーに転換して下さい。
- ・基準地震動の過小評価を止め、高浜3・4号の基準地震動を1000ガル以上へ、大飯3・4号基準地震動を1500ガル以上に引き上げ、耐震安全性を抜本的に強化して下さい。
- ・40年超のため再稼働の見込みのない貴社の7原発（美浜1～3号、大飯1・2号、高浜1・2号）を即刻廃炉にして下さい。
- ・日本原子力発電の敦賀1・2号、北陸電力の志賀2号からの「受電なき電力購入費」の契約を破棄して下さい。

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2014.4.9～2014.6.1)

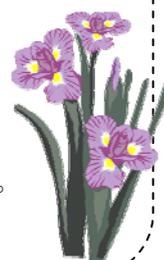
林律子 村上千佳子 川原重信 尾上照子 中山一郎 陶山喜代子 寺岡文 田中章子 木村英子 吉崎恵美子 松田光代 三田宜充 久保田洋一 山平利恵 岸本久美子 伊藤勝義 中川慶子 旦保立子 奥平純子 春木博美 小副川久代 佐野明弘 浜田守彦 小松裕子 尾崎浩子 (順不同・敬称略)

「国の責任による福島県の19才以上の甲状腺に係わる医療費無料化要請書」への賛同
まだ間に合いますので、お願いします！二次集約6月9日。6月10日に対政府交渉を行います。
 賛同のご連絡は<cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp>まで。対政府交渉の詳細は下記。
<http://www.jttk.zaq.ne.jp/hibaku-hantai/>

会費・カンパ納入のお願い

いつもご支援・ご協力ありがとうございます。

いつものお願いで心苦しいのですが、会費・カンパのご協力をよろしくお願いいたします。チェルノブイリ・フクシマの被災者との支援・交流や会報の郵送などに大切にに使わせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。なお振込用紙は皆さまに同封させて頂いています。すでに納入されている方は重複をお許しください。



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局
cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp
 連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町1-3-15-102 猪又方
 0722-53-4644
 郵便振替:00910-2-32752
 □座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西